

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 4 月 17 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00292

研究課題名（和文）国語科文学教育における創作理論と読解理論の相関研究

研究課題名（英文）A Correlational Study of Creative Writing Theory and Reading Comprehension Theory in Japanese Language Literature Education

研究代表者

西田谷 洋（NISHITAYA, HIROSHI）

富山大学・学術研究部教育学系・教授

研究者番号：70378230

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文学教育における創作理論の研究という視点から、創作技法が読者への効果を発揮するためには読解を想定した技法の運用が必要であり、読解理論と創作技法の連携が教育効果、創作の完成度が上がることから、効果的な技法の運用とその手順に関わる教育内容の検討とその充実を図る。そこで作家や学習指導要領の創作観を検討し、創作理論を利用した読解を行った上で、創作とは情緒ではなく論理であり、創作とは先行テキストとの関係や物語の構造・文脈、すなわち既にあるものを組み合わせることで世界を理解・表現するアダプテーションである以上、読解は必須として、空白補充創作、続編創作・技法転換創作、全編翻案創作を実践・検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学習指導要領の読解軽視・情緒重視・非論理として文学を捉える観点に対し、文学理論を用いて読解することの必要性と理論モデルの更新を行い、作家の創作論と実作の検討から創作には論理があること、国語科教育の創作理論が物語文法論レベルであるのに対し表現性や読解を捉えたアダプテーション創作を行うことによって、国語科文学教育の改善案を提案した。

研究成果の概要（英文）：As a study of creation theory in literature education, this study examined the view of creation by writers and study guides, and after reading using creation theory, practiced and examined blank-filling creation, sequel creation/technical conversion creation, and full-length adaptation creation, assuming that reading is essential since creation is logic, not emotion, and creation is adaptation to understand and express the world by combining relationships with prior texts and narrative structure and context, in other words, what already exists.

研究分野：日本文学

キーワード：創作理論 読解理論 創作モデル 授業実践 物語論

1. 研究開始当初の背景

新学習指導要領改訂によって高等学校の国語は古典・実用文重視、情緒・創作偏向、近現代小説・読解軽視へとシフトしたが、これはコミュニケーション技術・能力の伸長によって新自由主義と産業社会に奉仕することを目指すための教育改革の一環であるが、一方で指導要領作成者の近現代文学理解のなさによる。したがって、国語科文学教育における創作理論の検討は、軽視された読解の必要性を示すとともに情緒とは異なる論理を抽出することになり、また国語科教育で求められるとされる実用性・実効性の内実が問題となる。また、国語科教育においては創作の理論は情緒レベルでなければ物語文法レベルにとどまり、それでは創作の要たる表現等の問題には手が届かないことになる。文学研究の側から学習指導要領を検討するにはその偏向が批判されるとともに、創作指導の時間的困難性が指摘されていた。したがって、本研究ではそれらをカバーするため、改めて創作理論と読解理論の相関とその周辺から見えてくる問題を検討する。

2. 研究の目的

本研究課題申請時における当初の研究目的は次のようなものであった。

新学習指導要領における目玉科目「文学国語」は読解よりも創作の指導が中心である。創作理論は文壇作家や映画脚本家・漫画原作者等実作者のものや物語論研究者のものとがあり、前者は非体系的であることは創作実践としては非効率的であり応用可能性に欠け、後者は創作理論が作品構造レベルだけでなく受容者への機能レベルを捉えてこそ技法として機能することをふまえば、読解とはその効果の動態を示すものであり、読解理論と創作技法の連携が必要である。そこで、創作理論の特徴と達成、限界を明らかにすると共に、創作理論への読解理論の接続の仕組みを検討する。以上の検討において新たな読解・創作のための理論の修正・開発を試みる。その枠組みに基づく新たな作品読解を実践するとともに、創作実践のためのカリキュラム開発を支援する。

3. 研究の方法

創作や読解は以前からの蓄積があるため、本研究では21世紀にまとめられた書籍・論文集や雑誌論文の収集と分析を行い、国語科教育系での創作指導理論の展開を整理する。また、映像・画像作品などのエンターテインメント系創作理論とともに文壇作家の創作理論の主張を一部既に整理しているが、それを作家を増やして検討するとともに、創作理論のストーリー・会話・感情レベルでの分析を行うことで、文字作品の優れた達成あるいは指導要領への関与度を検討する。また、文学理論の中での技法・構造系の主張がそれらにいかにか組み込まれているかを調査し、同様に文字作品の優れた達成への関与度を検討し、コンテクスト・物語内容・物語表現の各レベルで創作理論と読解理論の相関をはかり理論的な枠組みを再考する。

また、文学理論の読解系の主張が作品創作の高度な達成には必要であるという仮説の検証を行う。その際、心情主義的な読解、倫理的な読解、レトリカルな読解等と創作との関係を整理し、「文学国語」の創作面での指導事項・指導内容に十全たる読解が必要であることを論証するとともに、アダプテーション・翻案による創作とその実践を試みる(ただし、コロナ禍によって附属学校との連携が困難となり、大学内のみで実践を行うにとどめたため、カリキュラム開発は限定的なものとなったことは補足しておかねばならない)。

最終的に総論・骨子となるような論文集の刊行を目指す。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

創作理論の検討

作家の創作作法書は作品創作を明示し、本科研以前から新美南吉(『新美南吉童話の読み方』双文社出版2013)・あまんきみこ(後掲の『女性作家は捉え返す』に収録)の創作作法について検討していた。さて、作家の実作には作法書には明示されない創作の論理がある。

「安房直子の創作方法」では、安房直子の自覚する創作技法(主たるエッセイ)と童話作品のズレを探ることで、作者の意図と読者への効果の違いがあり、読者が読解することで作品が理解されることを確認した。「徳田秋聲の小説作法書における読者意識」では、徳田秋聲名義の小説作法書の論述から作者が創作時にいかにか読者を意識しているかを検討し、作品を媒介とした作者と読者のコミュニケーションは断絶しているが故に双方を志向することが求められることが明らかになった。以上は、小説・童話の創作に関わるが、「室生犀星『新

しい詩とその作り方』の方法」では、(代作の疑われる)詩作作法書の詩作の姿勢と対象・題材、読解と創作の二つのトピックから整理し、矛盾・分裂する記述を検討することで、大正人格主義的な作家の個性の現れとしての創作観とともに具体策を示さず数多くの先行作品を読むことが創作につながるという相互テクスト的・アダプテーション的な創作観につながりうる側面も見いだした。

国語科教育に関わる創作理論の検討として国語科教育分野でのそれと学習指導要領の創作観の検討が必要である。そこで、「読解をふまえた物語の創作指導」では国語科文学教育における物語創作指導を目標に向かう「問題解決」学習であり、論理的な「思考力・判断力・表現力等」の能力を育成する総合的な言語活動として位置づけ、創作と読解の関係は相関関係があり、国語の授業では創作過程の指導を重視する必要があると整理した。また、「文学国語の創作観の背景について」では、高等学校学習指導要領の創作観の検討から文学国語の創作観の情緒への傾斜を確認し、情緒性を重視する創作観の背景にアメリカ映画のシナリオ作法の効果意識を探った。

読解理論の検討

創作理論は読解理論でもある。「シーモア・チャットマンの重層的な物語論モデル」では、チャットマンの物語論の作中人物・構成、語り手・視点、修辞を検討して物語構造観の重層性・複合性を見出し、物語論の操作概念と読解との関わりを検討した。また、「物語論を/で学ぶことの必要性」では、物語論で読解を行う際の、田中実が端を発し難波博孝が展開した読解モデル(助川幸逸郎・幸坂健太郎・岡田真範・難波博孝・山中勇夫『文学授業のカンドコロ 迷える国語教師たちの物語』文学通信 2022)の偏向に対し、改めて学習指導要領の読解観、フランスの文学教育での物語論の位置づけ、国語科教育での丹藤博文の指導モデル(『ナラティブ・リテラシー』溪水社 2018)の検討を行った。

創作理論は作者が仕掛けた読解のトリガーとして作品のフレームを作り出す。タイトル読みという作品タイトルを本文読解の鍵とする読解方法があるが、「タイトルという比喻」では、タイトルと本文解釈の関係を比喻型とメッセージ型とに二分する見解をただし、江國香織童話を事例に、全てが比喻型であり全てがメッセージ型であるとし、一方比喩的に分類する場合も必ずしも隠喩・換喩・提喩・アイロニーに分類しきれず、またタイトルは本編解釈に有効であるとともに無効でもあることを明らかにした。「虚構の民俗的カテゴリー」では小川洋子「百科事典少女」の虚構の感染モデルと共に代行・継承のモチーフが当該作収録短編集『最果てアーケード』の他の短編でも反復する。また、「読解を考える」では、小川洋子「缶入りドロップ」だけではなく当該教材が収められている短編集『海』全体を対象とすることで、作品に複数の解釈が可能な場合どのようなフレームが立ち上がりその解釈を支えているのかを認知言語学の協働モデルをもとに、作中人物の共働と作者と読者の共働という共働関係を利用した読解から、読解のフレームが物語表現＝物語内容として作者の創作によって半ば用意され読者が活性化させていることを検討した。

創作モデルの提案と授業実践

翻案は創作を創作者の独創性の発現ではなく読解による変形・改変の表出として捉えることを可能にする。

物語創作の論理的な捉え方や指導要領の情緒・心情主義的な創作観とは異なる創作観として、前述の「室生犀星『新しい詩とその作り方』の方法」(後述の『文学教育の思想』収録版ではさらに森山啓のマルクス主義的文学理論と実作を扱った部分を増補した)では、相互テクスト性・アダプテーションとしての詩作を検討した。さらに授業実践としては「アダプテーションとしての物語創作」(後述の『文学教育の思想』収録版ではさらに事例を増補した)では、物語教材の読解で得た知見をもとに続編創作を行い、また作品の翻案過程を読解することで、それもとにして自らが創作する翻案案を提示した。その点で、翻案による創作はこれまでの創作の蓄積をふまえ、かつまた読解力も育成しつつ、創作技能を高めうる方法であることを明らかにした。

講演会

研究代表者以外の知見の獲得のために講演会を行った。

国語科教育における読解行為研究の専門家である山元隆春広島大学大学教授を招いた講演会(「自立した読み手/書き手を育てる文学教育の構想 読者反応理論の視点から」2019年11月10日富山大学)を開き国語科教育における読解理論の展開についての知見を得た(前述の「に」に関わる)。文学研究者・国語科教育研究者であり小説家でもある大橋崇行成蹊大学准教授を招いた講演会(「『文学国語』の可能性 「創作」の授業をつくる」2022年11月19日富山大学)を開き文学国語で実践可能な創作と評価、また国語科教育の創作理論

の限界についての知見を得た（前述の に関わる）。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

やはり研究成果はパッケージとしての紙媒体論文集の体裁をとった方が図書館で物理的に読者の目にふれやすい点で、普及には必要である。そこで、(1) の論考を含んだ論文集『物語の共同体』、(1) の論考を組み込んだ論文集『女性作家は考える』、(1) の論考を含んだ論文集『文学教育の思想』を刊行し、成果をより学界・教育界の人々が入手しやすいようにした。

本研究を構成する論考 11 本のうち 3 本は学外全国査読誌掲載のものであり、本研究をそれぞれ部分的に収録した論文集は学会誌・書評紙等で書評された（『女性作家は捉え返す』 9 本、『物語の共同体』 5 本）。それらの書評でとりあげられた本研究に関わる論点は多くが読解の多様性、作者と読者の協働性に関わるものである。作者が創作する前には読解があり、読解は読者の創作としてなされるように、読解と創作は相関するからである。

ただし、本研究の中核となる『文学教育の思想』は刊行まもないため、本報告書執筆時点では学会誌の書評対象時期に入っておらず、書評がまたれる。そこで、簡単に『文学教育の思想』の本研究部分である第一部を簡潔に整理する。

文学を想像力の育成に限定する指導要領解説の姿勢を批判し、文学は論説・小説を始めとする知的著述であり、先行テキストとの関係や物語の構造・文脈、すなわち既にあるものを組み合わせる世界を理解・表現する工夫を評価する必要があり、物語創作を目標に向かう「問題解決」学習として、論理的な「思考力・判断力・表現力等」の能力を育成する総合的な言語活動でもある。また、したがって、物語は何らかの論理をメッセージの効果として作り出し、論理やメッセージを様々な角度から分析検討する作業が必要であり、そのために必要な手立ては読書感想文ではなく作品分析の小論文指導である。論理の修辞性、物語の論理性を検討することが、物語創作・物語読解を充実させ、現代を生きる力を伸ばすために必要として、現代における文学教育の有用性を確認した。

教室における読者は小説を構成する作者の思想とそれを外部化する言語表現の論理性を意識することが可能になる。文学国語が個人の感性・情緒を専らとし社会・世界への意識を欠落させていることから、それを打開するためには、物語論モデルだけでなくイデオロギー批評などのモデルをも創作学習の過程には組み込む必要があるとして、思考のための情報のインプット重視を提言した。

また、空白補充創作、続編創作・技法転換創作、全編翻案創作について、「ごんぎつね」、太宰治「女の決闘」、菊池寛「形」を対象にそれぞれ具体的な言語活動の内容を紹介し、問題点の多い文学国語の改善策を提示した。

(3) 今後の展望

もちろん、新学習指導要領の問題は創作と読解に限らない。国語で実用性・論理性が求められるにも関わらず、論理の飛躍・偏向が不可視化され、一方で小説作品等が実効性・実用性を発揮すると抑圧されるように、論理をめぐる力学の検討の必要性は本研究の遂行の中で浮上した問題である。

そこで、『文学教育の思想』第二部では説明文教材の論理とレトリック、論理国語の論理を評価する際の合理性の複数性、教材内のイデオロギー批評のモデルの提示や、演劇教育と実用性を考えるための弁証法的な取り組みの可能性、フィクション作品の実用性に関わる外的な力学の存在、さらには学会内の論文査読・発表登壇という本来学問的な論理評価がなされるべき部分に非論理的・反学問的・カルト的な思想統制が働いた事例の検討を行った。

本研究ならびに『文学教育の思想』第二部の成果をふまえ、今後は物語論と読解の関係、フィクションの社会的効力などについて、さらに精緻に検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西田谷洋	4. 巻 7
2. 論文標題 文学国語の創作観の背景について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代文芸研究	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷洋	4. 巻 増刊2
2. 論文標題 アダプテーションとしての物語創作	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学日本文学研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 (69)4
2. 論文標題 読解を考える 小川洋子『海』を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 72
2. 論文標題 読解をふまえた物語の創作指導	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川教育展望	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 710
2. 論文標題 虚構の民俗的カテゴリー 小川洋子「百科事典少女」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 解釈	6. 最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 60
2. 論文標題 安房直子の創作方法	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イミタチオ	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 1
2. 論文標題 徳田秋聲の小説作法書における読者意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学日本文学研究増刊	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 2
2. 論文標題 タイトルという比喻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学+	6. 最初と最後の頁 238-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 20
2. 論文標題 シーモア・チャットマンの重層的な物語論モデル	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 始更	6. 最初と最後の頁 114-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 45
2. 論文標題 室生犀星『新しい詩とその作り方』の方法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 室生犀星研究	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田谷 洋	4. 巻 46
2. 論文標題 物語論を / で学ぶことの必要性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学国語教育	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西田谷 洋
2. 発表標題 虚構のカテゴリー再び
3. 学会等名 創作理論×読解理論相關研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田谷 洋
2. 発表標題 読解を考える 小川洋子『海』を読む
3. 学会等名 日本文学協会シンポジウム「文学教育の挑戦」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田谷 洋
2. 発表標題 タイトルという比喻
3. 学会等名 広島大学文学部講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田谷 洋
2. 発表標題 室生犀星『新しい詩とその作り方』の方法
3. 学会等名 金沢近代文芸研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西田谷洋	4. 発行年 2021年
2. 出版社 能登印刷出版部	5. 総ページ数 288
3. 書名 物語と共同体	

1. 著者名 西田谷 洋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 女性作家は捉え返す	

1. 著者名 西田谷 洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 272
3. 書名 文学教育の思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

業績一覧 http://nishitaya.web.fc2.com/studypro/studypro10c.htm 創作理論×読解理論相關研究会 http://nishitaya.web.fc2.com/studypro/studypro10b.htm
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------